

Tough 構文における言語間の相違

服部 亮祐

Ryosuke Hattori

神戸学院大学人文学部

要旨 : This paper investigates cross-linguistic variation regarding so called *tough* constructions, focusing on their syntactic structure. First, the paper shows that the previous analyses of *tough* constructions have encountered difficulties with at least one of the core theoretical concepts of Case, locality constraints, and θ -role assignment, and that these problems are avoided by a new analysis by Hicks (2009). Following Hicks (2009), I claim that a complex null operator (CNO) is involved in English-type *tough* constructions ; it smuggles the nominative subject, which is dominated by the CNO. Crucially, for the smuggling to take place, there has to be a DP layer in the CNO. Second, in order to see if this analysis hold in other languages, this paper shows the result of a survey of 13 different languages, which reveals that English-type *tough* constructions are possible only in DP languages (languages with articles with D layer), based on the NP/DP parameter (e.g. Bošković 2005, 2008 and references therein). Finally, I claim that the size of the null operator (Op) is bigger in DP languages while Op in languages without articles (so called NP languages) are missing the D layer. This, in turn, explains why English-type *tough* constructions should be available only in DP-languages. Also, this paper points out that there is a further distinction in the *tough* constructions among those NP languages, i.e., the ones with a nominative subject without CNO and the ones without a nominative subject but with the topicalization of an object NP.

キーワード : 統語論, パラメーター, 空演算子, Tough 構文

1. はじめに

Tough 構文とは、英語では (1 a) のような文を指し、主語 (i.e. John) が不定詞の動詞 (i.e. please) の目的語として解釈されるという特徴がある。また、(1 b) のように形式主語を用いて書き換えることができる¹⁾。

(1) a. John is easy/tough to please.

b. It is easy/tough to please John.

また、以下の代名詞を用いた文から明らかなように、英語の *tough* 構文の主語には、不定詞の動詞の付与する対格 (Accusative Case: Acc) では無く、主格 (Nominative Case: Nom) が付与されている。

(2) a. He is easy/tough to please.

b. *Him is easy/tough to please.

このように、意味的には目的語、統語的には主語である文頭の名詞が特徴的な *tough* 構文の統語的分析において、先行研究では様々な問題が議論されてきた。

本論文は、Hicks (2009) の複合空演算子を用いた分析が先行研究における統語的分析の問題点を解決するこ

とを概観し、英語を含めた 13 の言語の *tough* 構文における相違を示したのち、NP/DP パラメーター (e.g. Bošković 2008) との相関性を指摘した上で、*tough* 構文の言語間の統語的違いを解明することを目的とする。

2. 統語的分析

まず、主格の主語と演算子移動の性質を持つ英語の *tough* 構文に、格付与や局所性、主題役付与などの統語論上の核心的な概念について様々な問題が生じることを概観し、これらの問題が、smuggling 操作 (Collins 2005 a, b) を伴った複合空演算子の移動 (Hicks 2009) によって解決することを主張する。

2.1. 構成素の移動

統語論において Wh 句などの演算子は、以下 (3 a) で示すように、CP (節) 指定部に移動し、埋め込み文からの移動は (3 b) のように埋め込み節の CP 指定部を通して連続循環的に行われると考えられている (t は痕跡 (trace) を示す)。

- (3) a. [_{CP} what_i [_C did John say t_i]]?
 b. [_{CP} what_i [_C did you think [_{CP} t_i [John would say t_i]]]]?

また、以下の例で示すように、島の制約 (Ross 1967) と呼ばれる、wh 句が複合名詞句や間接疑問文に埋め込まれた位置から抜き出された場合、非文法的になる現象がある。

- (4) a. John hit [the person [who was reading the book at the table]].
 b. *How many books did John hit [the person [who was reading __ at the table]]?
 c. Bill wondered [when John ate the apple].
 d. *What did Bill wonder [when John ate __]?

これは、埋め込み節の CP 指定部位置を他の wh 句が占めているため、移動が妨げられ、文が非文法的になると説明できる。さらに、同じ島の制約が英語の tough 構文においても見られる (Chomsky 1977)。

- (5) a. John_i is easy (for us) [to convince Bill [to do business with t_i]].
 b. *John_i is easy (for us) [to describe to Bill [a plan [to assassinate t_i]]].
 c. *Which sonatas_i are the violin_j easy [to play t_i on t_j]²⁾.

このことから、tough 構文においても、何らかの構成素が移動していると考えられる。

2.2. 英語 tough 構文の分析における問題点

構成素の移動を伴う英語の tough 構文の統語的分析は、格付与、局所性、主題役付与などの統語論上の核心的な概念にとって問題となる。例えば、以下 (6) で示すような、tough 構文の主語を埋め込み節の目的語位置から繰り上げる分析 (e.g. Rosenbaum 1967; A-movement 分析) は、格付与に関して問題が生じる。

- (6) He_i is easy [_{CP} [_{TP} PRO to please t_i]].

すなわち、主語がなぜ不定詞の動詞 (i.e. please) による対格 (目的格) の付与を免れることができるのか、を説明できないのである³⁾。

また、以下 (7) に示した Chomsky (1977) による空演算子の移動分析では、主語が基底生成し⁴⁾、移動した空演算子 (Op) と同一指標となる。

- (7) He_i is easy [_{CP} Op_i [_{TP} PRO to please t_i]].

この分析では、主語が元々目的語の位置にないため、上

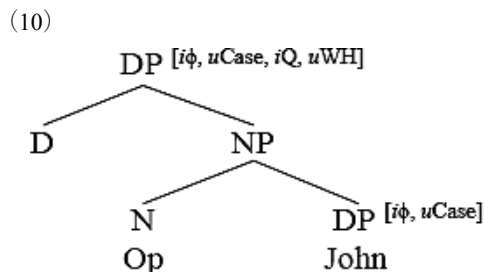
述の格付与の問題が生じない。しかし、この分析では主語に主題役⁵⁾ (θ-role) が与えられないという問題がある。まず、Tough 構文の述部がその外項 (主語) に主題役を与えないことが、以下の対比からわかる。

- (8) a. It is tough to please linguists.
 b. To please linguists is tough.
 (9) a. *It is pretty to look at these flowers.
 b. *To look at these flowers is pretty.

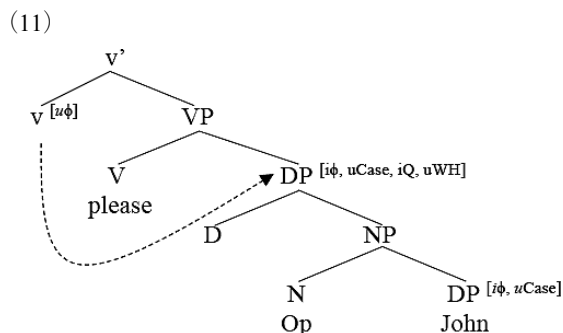
すなわち、pretty などの形容詞では、述部が主題役を持った主語を要求するため、形式主語や不定詞句の主語が許されないのに対し、tough 構文では主題役を主語に付与しないため、許されるのである。よって、(7) の分析では、不定詞の動詞の目的語に付与される主題役がいかにか空演算子と基底生成された主語の間で共有されるのか、という問題が生じる。

2.3. 複合空演算子移動分析

Hicks (2009) は、上述の問題の発生しない新しい分析を提示した。彼の主張は、tough 構文の空演算子が、典型的な空演算子と比べて、より複雑な内部構造を持つ wh 句になっている、というものである。すなわち、以下のような、tough 構文の主語になる DP を内部に持つ複雑な DP になっているとしている。

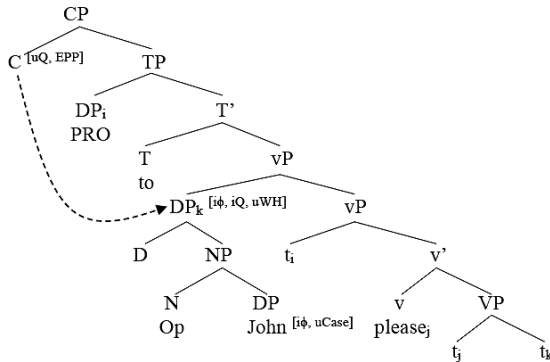


この複合空演算子 (Complex Null Operator: 以下 CNO) 分析に基づいて、例えば John is easy to please. という tough 構文の派生は以下のように進む。まず、目的語の位置で CNO が動詞 please と結合し、被動者 (patient) の主題役を付与される。次に、以下の図で示すように、VP が v と結合し、CNO が v と φ 素性⁶⁾の照合を通して CNO の [uCase] が削除される。



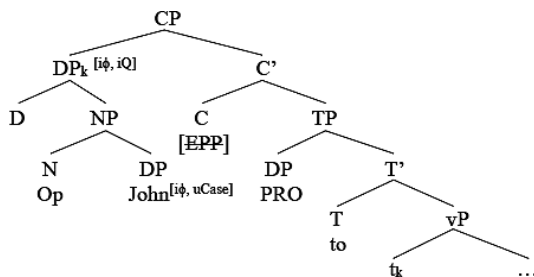
さらに、以下の図で示すように、please の V-to-v 移動後に、PRO が外項として結合され、[iQ, uWH] 素性⁷⁾を持つ CNO は、最終的に CP 指定部に移動するために、vP 指定部に移動する。ここで重要なのが、この CNO がその内部の DP である John を随伴 (pied-piping) して移動することにより、John の [uCase] が削除されることなく (つまりここで目的格を付与されることなく)、抜き出されるということである。この操作は一般的に smuggling (Collins 2005 a, b) と呼ばれている。

(12)



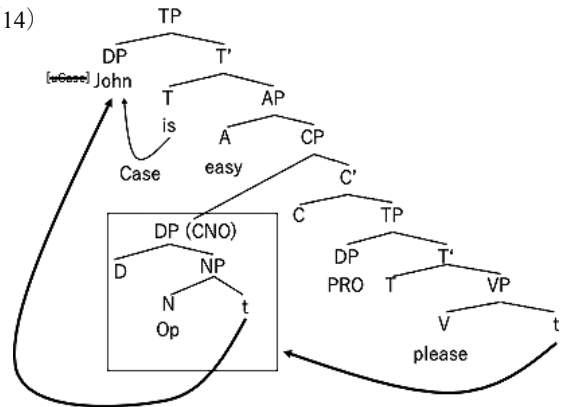
そして、PRO が埋め込み節の TP 指定部に移動後、TP に結合した C の [uQ] が、CNO の [iQ] と一致し、[uWH] が削除される。次に、C の [EPP] 素性⁸⁾が、以下で示すように、CNO の CP 指定部への移動を促す。この時点で、CNO のすべての素性が認可され、この位置で凍結⁹⁾ (Rizzi 2006) する。

(13)



最後に、主節の [uφ] を持つ T が結合され、[iφ] を持つ John と一致、John が TP の指定部に移動後、主格が付与され、[uCase] が削除される。

(14)



まとめると、この分析では、CNO が V と目的語として結合する際に、受動者の主題役が DP 全体に付与され、CNO が埋め込み節の CP に結合した際に内側の DP が smuggling 操作によって移動するため、対格の付与を受けることなく、主節の主語位置に移動し主格を付与されることになる¹⁰⁾。よって、2.2 節で示した先行研究の問題点が解決されるのである。

3. 言語間の相違

ここまで述べてきたように、主格の主語と演算子移動の性質を持つ英語の tough 構文には分析上様々な問題が生じ、smuggling 操作を伴った複合空演算子の移動が必要であることがわかった。しかし、英語以外の言語にも、同じ分析が可能なのであろうか。そこで、英語以外の 12 の言語 (ドイツ語、スペイン語、イタリア語、フランス語、ブルガリア語、ハンガリー語、タイ語、日本語、セルビア・クロアチア語、スロヴェニア語、ポーランド語、ロシア語) について、アンケート調査を行なった。その結果、これらの言語は、三つのタイプに分かれることがわかった。

3.1. Type i : 英語型

英語以外にも、ドイツ語やいくつかのロマンス系言語 (e.g. Montalbetti, Saito and Travis 1982 ; Cinque 1990 ; Roberts 1993 ; Wurmbrand 2001) に、主格の主語を持つ tough 構文 (easy-to-please 構文とも呼ばれる) がある。例えば、以下に示すように、ドイツ語¹¹⁾の tough 構文は主格 (NOM: Nominative) が付与された主語を持ち、この主語は、不定詞の動詞の目的語として解釈される。

(15) a. Dieser Konflikt ist leicht zu lösen t_i

This.NOM conflict.NOM is easy to solve
‘This conflict is easy to solve’

b. Es ist leicht, diesen Konflikt zu lösen.
it is easy this.ACC¹²⁾ conflict.ACC to solve

‘It is easy to solve this conflict.’

c. John hat den/diesen Konflikt gelöst.

John has the.ACC/this.ACC conflict.ACC solved

‘John solved the conflict.’

ここで、不定詞節に使われている動詞の lösen ‘solve’ は通常、対格で標示された目的語をとる。つまり、tough 構文 (15 a) の主語の dieser Konflikt ‘this conflict’ は、不定詞動詞に格を付与されていないということになる。

一方、ドイツ語では、内在格 (inherent Case) を付与する動詞が tough 構文で用いられた時には、主語が不定詞動詞に付与された内在格 (例えば与格/Dative: DAT) を維持するように思われる。

(16) a. Ihm ist leicht zu helfen

he.DAT is easy to help

‘He is easy to help.’

b. Es ist leicht, ihm zu helfen.

it is easy he.DAT to help

‘It is easy to help him.’

(17) Bitte hilf mir

Please help me.DAT

‘Please help me.’

しかし、ドイツ語に与格を含む斜格の主語がないとする Zaenen et al. (1985) に従うと、この tough 文の動詞の前にある斜格の名詞句は文法的な主語ではない (すなわち、TP 指定部の位置にはない) と考えられる。奇態格 (quirky Case)¹³ の主語を持つとされるアイスランド語では、(18 c) のように、斜格の名詞句が、等位接続された主格の名詞句との同定により削除される。一方、(19 c) で示すように、ドイツ語の受動文の文頭に現れる斜格名詞句は削除を受けない。

(18) Icelandic

a. þeir fluttu líkið og þeir grófu það.

they.NOM moved the-corpse and they buried it

b. þeir fluttu líkið og ___ grófu það

c. Hann segist vera duglegur, en ___ finnst

he.NOM says-self to-be diligent, but ___ .DAT finds

verkefnið of þungt.

the-homework too hard

‘He says he is diligent, but finds the homework

too hard’

(Zaenen et al. 1985, 453-454)

(19) German

a. Er kam und (er) besuchte die Kinder.

he.NOM came and (he) visited the children

b. Er kam und (er) wurde verhaftet.

he came and (he) was arrested

c. *Er kam und ___ wurde geholfen.

He came and was helped

(Zaenen et al. 1985, 477)

この主語テストに対して、ドイツ語の tough 文に現れる文頭の斜格名詞句も同じ振る舞いを見せる (p.c. Sabine Laszakovits and Roman Reitschmied)。

(20) *Er hat überlebt und ___ war leicht zu helfen.

he.NOM has survived and was easy to help

‘He survived and ___ was easy to help.’

(21) Dieser Konflikt verschlechtert sich und ___ ist

this.NOM conflict worsened refl and is

schwierig zu lösen.

difficult to solve

‘This conflict worsened and is difficult to solve.’

このことから、ドイツ語の文頭に現れる斜格標示された名詞句は、主語ではないと考えられる。

さらに、英語と同じく、ドイツ語の tough 文にも島の制約が見られる (p.c. Sabine Laszakovits and Roman Reitschmied)。

(22) a. Es ist leicht den Plan zu beschreiben, John zu

It is easy the.ACC plan to describe John to

töten.

kill

‘It is easy to describe a plan to kill John’

b. *Der John ist leicht den Plan zu

the.NOM John is easy the.ACC plan to

beschreiben, ___ zu töten.

describe to kill

‘*John is easy (for us) to describe a plan to kill’

したがって、ドイツ語 tough 文は英語と同じように CNO の移動が関わっており、主語が smuggling 操作で主節 TP 指定部に移動し、主格が付与されると考えられる。このような英語型 (Type i) の性質を示す言語には、他にもスペイン語やイタリア語、フランス語があった。

3.2. Type ii : 日本語型

日本語は一見、(23) のように、英語型の主格 (NOM) の主語を持つ tough 構文を許すように思われる。

(23) John_i -ga yorokobase yasu -i.

-NOM please easy -PRES

‘John is easy to please’

しかし、Takezawa (1987) はこのような文を英語の tough 構文と同じように分析すべきではないと主張した。これは、(24) で示すように、日本語の tough 文に島の制約が見られないからである。

- (24) a. [kono te-no hanzai]_i -ga (keisatu-nitotte) [_{NP} [_{S'} e_i
This kind-of crime -NOM police-for
e_i okasi-ta] ningen]_j-o sagasi-yasu-i.
commit-PST man-Acc search-easy-PRES
(この手の犯罪が、(警察にとって,) 犯した人間を探しやすい。)
*[This kind of crime]_i is easy (for the police) to
search [_{NP} a man [_{S'} who committed e_i]]'
- b. [kooitta itazura]_i -ga (senseigata-nitotte)
This-kind-of trick -NOM teachers-for
[_{NP} [_{S'} e_j e_i sita] seito]_j-o mituke-yasu-i.
do-PST pupil-ACC find-easy-PRES
(こういったイタズラが、(先生方にとって,) した生徒を見つけやすい。)
*[This kind of trick]_i is easy (for the teachers)
to find [_{NP} a pupil [_{S'} who played e_i]]'
- c. [Sooiu ronbun]_i -ga (watasi-nitotte)
That-kind-of paper -Nom me-for
[_{NP} [_{S'} e_j e_i kai-ta] gakusei]_j-o hyookasi-niku-i.
write-PST student-ACC evaluate-difficult-PRES
(そういう論文が、(私にとって,) 書いた学生を評価しにくい。)
*[That kind of paper]_i is difficult (for me) to
evaluate [_{NP} a student [_{S'} who wrote e_i]]'
(Takezawa 1987, 203)

Takezawa は、この違いから、日本語の tough 文には演算子 (Op) の移動が関わっていないと主張した。これは、Saito (1985) が関係節の派生について主張したように、日本語では空の再述代名詞¹⁴⁾ (empty resumptive pronoun: pro) が生起可能であり、これが (23) の tough 構文の空所 (すなわち不定詞動詞の目的語位置) にあるため、移動なしに主節の主語と長距離の照応関係が築かれるためである。

- (25) John_i -ga [_{AP} [_{S'} [_S PRO **pro**, yorokobase]] yasu -i]]
-NOM please easy -PRES
'John is easy to please'

すなわち、日本語の tough 文には、主格の主語こそ現れるが、これは基底生成したもので、英語のような複合演算子の移動は関わっていないと考えられる。

日本語と似たパターンを示す言語に、タイ語がある¹⁵⁾。まず、以下の例から分かるように、タイ語には日本語 tough 文に現れる -yasui/-nikui 'easy/-difficult' に対応する形態素 -ngai/-yak 'easy/-difficult' が見られる。

- (26) nang sue nian-yak.
book this read -difficult.
'This book is difficult to read'

- (27) khao deejai-ngai.
he happy -easy
'he is easy to make happy'

もう一つ重要な類似点だが、日本語と同じように、タイ語の tough 文には島の制約が見られないということである。

- (28) achyakrrm ni jab [khon [ti tam e]] -ngai.
crime this arrest person who did -easy
'This (type of) crime is easy to arrest the person who did t.'

また、タイ語には再述代名詞が存在する。例えば、以下の関係節において、修飾される名詞 khon 'people' を指す代名詞 khaw 'they' が生じている¹⁶⁾。

- (29) khon [thii khaw pay yuu kan taam ronrrian].
people C they go stay REC¹⁷⁾ at school
'People who want to stay at school...'

これらのことから、タイ語の tough 文にも日本語と同じように空の再述代名詞が空所に存在し、これが基底生成した主語と同一指標になっていると考えられる。

3.3. Type iii : 非主格型

調査の結果、いくつかの言語において、もう一つのタイプの tough 文を持つ言語が見つかった。これは、主格以外の格を持つ名詞句が外見上の主語位置を占めているような tough 文である。つまり、その派生において、主語が複合空演算子 (CNO) によって smuggling 移動する必要がないということになる。例えば、セルビア・クロアチア語 (SC)¹⁸⁾ の tough 構文に当たる文は、(30) のようになり、(31) を見ると、ここで外見上の主語位置を占める名詞句はいずれも不定詞の動詞 *ugoditi* 'please' / *otпустiti* 'fire' によって付与された格を持つことが分かる。

- (30) a. Njemu/*On je lako ugoditi.
him.DAT/he.NOM is easy.ADV please.INF
'He is easy to please'
b. Njega/*On je lako otпустiti.
him.ACC/he.NOM is easy.ADV fire.INF
'He is easy to fire'
- (31) a. Ivan je ugodio njemu.
Ivan is pleased him.DAT
'Ivan pleased him (but not her)'
b. Šef je otпустio njega.
boss is fired him.ACC
'The boss fired him (but not her)'

また、文頭の名詞は規範的目的語の位置にも現れ、この場合、主語が音声的に省略され空範疇になる。

- (32) a. Lako je ugoditi njemu.
 easy.ADV is please him.DAT
 ‘It is easy to please him (but not her)’
 b. Lako je otpustiti njega.
 easy.ADV is fire.INF him.ACC
 ‘It is easy (for the boss) to fire him (but not her)’

このことから、(30)の「tough 構文」の文頭にある不定詞動詞の目的語は話題化あるいは焦点化のために移動したもので、真の主語は空範疇になっていると考えられる。

- (30') a. Njemu_i [je lako ugoditi t_i].
 him.DAT is easy.ADV please.INF
 ‘Him, it is easy to please’
 b. Njega_i [je lako otpustiti t_i].
 him.ACC is easy.ADV fire.INF
 ‘Him, it is easy to fire’

したがって、セルビア・クロアチア語のような言語の tough 文では、不定詞動詞の補部位置から目的語が直接移動しており CNO も smuggling 操作も関わっていないと考えられる。調査の結果、このようなパターンを示す言語は他に、スロヴェニア語、ポーランド語、ロシア語、ブルガリア語、ハンガリー語があった。

3.4. タイプのまとめ

以上見てきたように、調査の結果 13 の言語の tough 文は、3つのタイプに分かれることがわかった。すなわち、主語が CNO 内に基底生成し Smuggling によって主語位置に移動後に主格が付与される英語型 (Type i)、主語が基底生成し再述代名詞 (pro) と同一指標になる日本語型 (Type ii)、形式主語が省略され目的語位置の名詞句が選択的に話題化のため文頭に移動する非主格型 (Type iii) の3タイプである。

- (33) a. 英語型 (Type i) : Subj(NOM)_i is tough [_{CNO} ... t_i ...]_i to please t_i
 b. 日本語型 (Type ii) : Subj(NOM)_i is tough to please pro_i
 c. 非主格型 (Type iii) : NP(DAT/ACC)_i is tough to please t_i

この分類に基づき、調査した各言語の Type を以下の表にまとめる。

表1 tough 文のタイプ

Languages	Types
English	i
German	i
Spanish	i
Italian	i
French	i
Bulgarian	iii
Hungarian	iii
Thai	ii
Japanese	ii
SC	iii
Slovenian	iii
Polish	iii
Russian	iii

ここから、CNO の移動が関わる Type i の本来の「tough 構文」は、英語を含む限られた言語でのみ許されることが分かる。

4. パラメーターによる説明

前節で明らかになった、言語によって tough 文が3つのタイプに分かれ、英語のような主語が主格で現れ移動が関わる tough 構文に限られた言語でのみ許されている、という事実について、原理とパラメーターの理論¹⁹⁾に基づいた説明を試みる。

4.1. NP/DP パラメーターとの相関性

Bošković (2005, 2008, 2009, 2013) は、各言語における冠詞の有無に相関する幅広い統語的・意味的現象を基に、多くの一般化を示している。

- (34) a. Only article-less languages may allow left-branch extraction out of NP.
 b. Only article-less languages may allow adjunct extraction from NP.
 c. Only article-less languages may allow scrambling.
 d. Multiple wh-fronting article-less languages do not show superiority effects.
 e. Only languages with articles may allow clitic doubling.
 f. Article-less languages do not allow transitive nominals with two genitives.
 g. Head-internal relatives display island sensitivity in article-less languages, but not in languages

- with articles.
- h. Polysynthetic languages do not have articles.
- i. Only languages with articles allow the majority reading of MOST.
- j. Article-less languages disallow negative raising (i.e. strict clause-mate NPI licensing under negative raising); those with article allow it.
- k. Negative constituents must be marked for focus in article-less languages.
- l. The negative concord reading may be absent with multiple complex negative constituents.

これらの一般化を基に、Bošković は、冠詞を持たない言語には構造的 DP 層が存在しないと主張した。すなわち、原理とパラメターの理論に基づくと、言語には、「NP/DP パラメター」という「名詞句が NP なのか DP なのか」というパラメターがあり、日本語のような冠詞を持たない言語は NP 言語で、英語のような冠詞を持つ言語は DP 言語であるということである。

(35) a. DP-languages: b. NP-languages:



このパラメターを前提に、表 1 の言語について、NP/DP パラメターの値を加えたのが以下の表 2 である。ここで、四角で囲んだ部分が、NP/DP の区分と特定の Tough 文が可能かどうかとの間の相関性を示している。

表 2 NP/DP パラメターと tough 文のタイプ

Languages	NP/DP	Types
English	DP	i
German	DP	i
Spanish	DP	i
Italian	DP	i
French	DP	i
Bulgarian	DP	iii
Hungarian	DP	iii
Thai	NP	ii
Japanese	NP	ii
SC	NP	iii
Slovenian	NP	iii
Polish	NP	iii
Russian	NP	iii

より正確にいうと、ここで見られる一般化は、Type i 「tough 構文」が可能であることと DP 言語であることとの間に、一方向の相関があるということである。

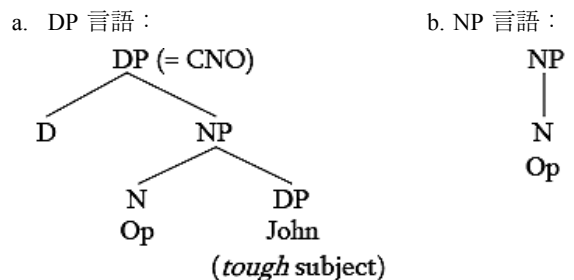
(36) 英語型 (Type i) tough 構文が可能なのは、DP 言語でなくてはならない

ここで、明らかな疑問は、何が DP 言語で英語型 tough 構文を可能にし、NP 言語でこれを不可能にしているのか、ということである。

4.2. NP/DP パラメターとの相関性の説明

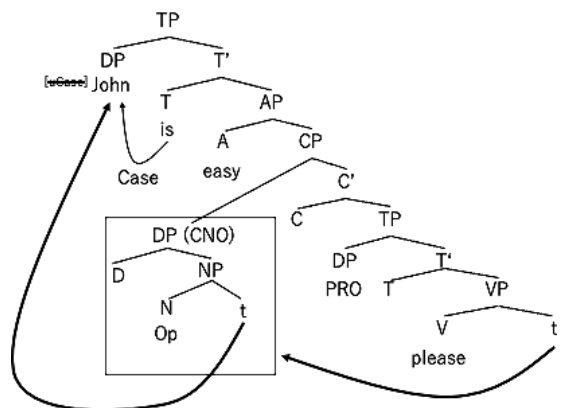
NP/DP パラメターに基づいて考えると、演算子 (Op) の構造が NP 言語と DP 言語で異なると考えられる。すなわち、本稿は、「Op は DP 言語ではより複雑な構造を持っている一方、NP 言語では DP 層が欠けている」と主張する²⁰⁾。すなわち、以下の例で示すように、tough 構文の Op は DP 言語では CNO であり、内部に tough 構文の主語となる DP が基底生成している一方、NP 言語では NP を投射する N 主要部になっているということである。

(37) tough 文における空演算子



tough 構文の CNO 分析 (Hicks 2009) では、複合的 DP (CNO) によって tough 主語が埋め込まれた不定詞節から smuggling 操作によって抜き出される。

(38 = 14)



つまり、英語のような tough 構文 (演算子移動を伴う主格主語を持つもの) には複合的 DP の構造が必要不可欠であり、smuggling に必要な DP 層がそもそも存在しな

い NP 言語では英語型 tough 構文を派生するのが不可能ということになる。これこそが、「英語型 (Type i) tough 構文が可能な言語が、DP 言語でなくてはならない」理由である。

4.3. 例外の説明

DP 言語と tough 構文の相関は、一方向のものである。すなわち、DP 言語であっても英語型 (Type i) tough 構文を持たない言語がある。以下の表で示すように、ブルガリア語とハンガリー語がこれに当たる。これらの DP 言語で英語型 tough 構文が使われないのは何故なのか。

表 3 NP/DP パラメーターと tough 文のタイプ (例外)

Languages	NP/DP	Types
English	DP	i
German	DP	i
Spanish	DP	i
Italian	DP	i
French	DP	i
Bulgarian	DP	iii
Hungarian	DP	iii
Thai	NP	ii
Japanese	NP	ii
SC	NP	iii
Slovenian	NP	iii
Polish	NP	iii
Russian	NP	iii

まず、ブルガリア語は以下 (39) のように、主格ではなく埋め込み節の動詞の目的語が付与される格を持った名詞が文頭に現れる type 3 の tough 文を用いる。ただ、他の Type iii 言語と違い、ブルガリア語では不定詞が使われるのが稀であり、tough 文では仮定法・叙想法 (subjunctive) の補文標識 *da* を伴った定形節が使われている。

- (39) a. Nego e lesno da go
 him.Acc be.3 sg.pres easy subj he.Acc.clitic
 ubedish.
 convince
 ‘Him, it is easy to convince’
 b. *Toy e lesno da go
 he.Nom be.3 sg.pres easy subj he.Acc.clitic
 ubedish.
 convince
 ‘Intended: He is easy to convince’

また、同じく主格名詞が許されないハンガリー語の

tough 文は、以下で示すように、不定詞の動詞が使われ、補文標識は使われていない。

- (40) a. János-t könnyű meg-győz-ni.
 John-acc easy prt-convince-inf
 ‘John is easy to convince’
 b. János-nak könnyű hin-ni.
 John-dat easy believe-inf
 ‘John is easy to believe’
 c. *János könnyű meg-győz-ni.
 John-nom easy prt-convince-inf
 ‘Intended: John is easy to convince.’

ただ、ハンガリー語の不定詞節は、定形節のような完全な CP の構造を持っているとされる (Kenesei 2005; Dalmi 2004)。例えば、以下で示すように、TopP (話題) と FP (焦点) が定形節の CP と同じ順序で左端周辺部²¹⁾ (left-periphery) に現れる。

- (41) András meg-tanította a diákokat [CP [TopP
 Andrew PV-taught the students-ACC
 a mondatot
 the sentence-ACC
 [FP CSAK LFG-BEN [AGRP elemezni PRO]]].
 only LFG-in analyze-INF
 ‘Andrew taught the students to analyze sentences
 ONLY IN LFG.’

以上のことから、ブルガリア語とハンガリー語の tough 文は他の言語と違い、不定詞節が定形節のような完全な CP を持っていると考えられる。この点について重要なのが、実は英語でも tough 構文における演算子は定形節を超えて移動することができない、ということである (Stowell 1986)。すなわち、以下それぞれの英語の例文において、Op は定形節から抜き出されているが、不定詞節からの移動が関わる通常の tough 構文と比べて、どれも容認性が低くなっていることがわかる。

- (42) a. *Betsy_i is easy [Op_i [PRO to expect [t_i fixed the car]]].
 b. *John is easy [Op_i [PRO to believe [t_i kissed Mary]]].
 c. ??This car is hard [Op_i [PRO to claim [[Betsy fixed t_i]]]].
 d. ??That language is impossible [Op_i [PRO to say [[Greg will learn t_i]]]].

(Stowell 1986: 477)

つまり、元々不定詞節ではなく定形節の CP を用いるブルガリア語、ハンガリー語では、これが tough 文において Op/CNO の移動を阻害する要因になっており、DP 言語でありながら英語型の tough 構文が作られず、Type

iii の tough 文を使わざるを得ない、と説明できるのである。

5. おわりに

本論文は、Hicks (2009) の複合空演算子を用いた英語型 tough 構文の分析と NP/DP パラメーター (e.g. Bošković 2008) に基づいて、13 の言語における言語間の tough 文の相違について理論的説明を加えた。英語型 tough 構文において主語になる名詞句は、不定詞動詞の目的語位置で格を付与されることなく主語位置で主格を受けるために、DP 構造を持った複合空演算子 (CNO) によって smuggling 操作を受ける。NP/DP パラメーターに基づく、この分析において必要不可欠な DP 層が、NP 言語には欠如しているということになる。このことが、13 の言語に対するアンケート調査の結果判明した、「英語型 tough 構文は DP 言語でしか許されない」という一般化を説明するのである。また、英語型 tough 構文を許さない DP 言語については、それらの言語の tough 文で定形節の CP が用いられることから説明できることを示した。

謝辞

本稿は、2021年3月6日に開催された第25回人文学会研究会(於神戸学院大学)で発表した内容を基に執筆したものである。発表の際、貴重ご意見・ご指摘をいただいたことに感謝する。

注

- 1) ニュアンスの違いとして、(1a) は (1b) に比べ、文頭に移動した John が話題化されていると考えられる。
- 2) ここで、which sonatas は、統語上は存在するが音形のない空演算子を超えて移動している。
 - (i) a. The violin is easy [_{CP} Op_i PRO to play sonatas on t_i].
 - b. *Which sonatas_k are the violin easy [_{CP} Op_i PRO to play t_k on t_i].
- 3) 同様に、以下のような、目的語位置に生成した名詞句が埋め込み節の CP 指定部を通して主語位置に移動する A/A'-movement 分析 (e.g. Postal 1971) においても主語の格の不一致 (主格 vs. 対格) が問題となる。
 - (i) John_i is easy [_{CP} t_i [_{TP} PRO to please t_i]].
- 4) 基底生成 (base-generation) とは、派生の初期段階で元々その位置に生成することを指す。
- 5) 主題役とは、述語が項に与える、文の解釈に必要な意味的役割のことで、例えば、以下の例で、述語 please は外項 (主語) に agent (動作主)、内項 (目的語) に theme (主題) の主題役を付与すると考えられている。
 - (i) The news pleased him
agent theme

- 6) φ 素性とは、人称・数・性に関する素性で、名詞句が一致によってその値を与えることで、音韻・形態的に具現化されるものと考えられている。
- 7) Chomsky (2000) は、移動や格標示が起こる仕組みを解釈不可能素性によって説明する。移動を引き起こす要素である probe が移動する要素である goal を探索しその移動を引き起こす際には、goal が解釈不可能素性を持っており、活性化された状態でなければならない。また、探索の際には、素性の照合 (feature-checking) が行われる。例えば、wh 句のような演算子は解釈不可能な wh 素性 ([uWH]) を持ち、CP (節) の主要部 C と wh 素性照合関係になるため、goal である C の解釈不可能な Q 素性 ([uQ]) が、wh 句を SpecCP (CP 指定部) への移動に関して活性化させる。結果、Q 素性は移動後に wh 素性の照合を通して削除される。
- 8) EPP (Extended Projection Principle) とは、句の指定部に義務的に要素を要求する普遍文法の原理の一つである (Chomsky 1981)。
- 9) 凍結 (Freezing) とは、移動などの変形規則が適用できない状態を指す。
- 10) Smuggling 操作により二重格付与の問題を解消しようとする Hicks (2009) の方法自体についての考察は、Brillman (2017)、Poole et al. (2017) を参照されたい。また、Smuggling 操作を用いた分析は tough 構文だけではなく、受身文や主語繰り上げ文の派生を説明する際にも用いられる場合がある (Collins 2005 b)。
- 11) ドイツ語の文の文法性について判断していただいた、Sabine Laszakovits 氏に感謝する。
- 12) ACC: Accusative Case (対格)
- 13) アイスランド語などで、時制文の主語や目的語が斜格 (oblique Case) になる特殊な格標示現象のこと (Marantz 1981)。
- 14) 空の再述代名詞の例として Saito (1985:293) は以下のような例を挙げた。
 - (i) [[pro_i 死んだのに] だれも悲しまなかった] 人_i;
この例では副詞句の中に空所があり、この位置から演算子の移動が行われるとすると英語のような言語では島の制約に違反するため、非文法的となる。日本語は、空所に空範疇の代名詞 pro が自由に生起可能な言語であるため、文法的な文になっていると考えられる。
- 15) タイ語の文の文法性について判断していただいた、Panat Taranat 氏と Sidney Mao 氏に感謝する。
- 16) この明示的な再述代名詞は日本語には見られない (e.g. *彼らが学校に居たい人たち)。そのため、完全に並行な議論にはなっていないが、これがタイ語に再述代名詞が存在することを示す例であることに変わりはない。
- 17) REC = reciprocal
- 18) セルビア・クロアチア語の文の文法性について判断していただいた、Aida Talić 氏と Ivana Jović 氏に感謝する。
- 19) Noam Chomsky が提示した、普遍文法が、全ての言語に共通した原理 (principles) と、言語ごとに選択可能なパラメーター (parameters) から成っていると考える。
- 20) 服部 (2020) は、比較構文に関わる演算子移動においても同じ主張をしている。

21) Rizzi (1997) は、CP (節構造) は複雑な左端周辺部の構造を持っており、固定された順序で ForceP (発話力), TopP (話題), FocP (焦点), TopP (下位話題), FinP (定形節) があると主張している。

引用文献

- Bošković, Željko. 2005. On the locality of left branch extraction and the structure of NP. *Studia Linguistica* 59(1) : 1-45.
- Bošković, Željko. 2008. What will you have, DP or NP? In *NELS 37*, ed. by Emily Elfner and Martin Walkow, 101-104. Amherst : University of Massachusetts, Graduate Linguistic Students Association.
- Bošković, Željko. 2009. More on the no-DP analysis of article-less languages. *Studia Linguistica* 63 : 187-203.
- Bošković, Željko. 2013. Phases beyond clauses. In *The nominal constructions in Slavic and beyond*, ed. by Lilla Schürcks, Anastasia Giannakidou & Urtzi Etxeberria, 75-128. Berlin : Mouton de Gruyter.
- Brillman, Ruth. 2017. Tough constructions in the context of English infinitives. Doctoral dissertation, MIT.
- Cinque, Guglielmo. 1990. *Types of A'-dependencies*. Cambridge, MA : MIT Press.
- Collins, Chris. 2005 a. A smuggling approach to raising in English. *Linguistic Inquiry* 36. 289-298.
- Collins, Chris. 2005 b. A smuggling approach to the passive in English. *Syntax* 8. 81-120.
- Chomsky, Noam. 1977. On Wh-Movement. In *Formal Syntax*, ed. by Peter Culicover, Thomas Wasow, and Adrian Akmajian, 71-132. New York : Academic Press.
- Chomsky, Noam. 1981. *Lectures on government and binding*. Dordrecht : Foris.
- Chomsky, Noam. 2000. Minimalist inquiries : The framework. In *Step by step : Essays on minimalism in honor of Howard Lasnik*, ed. by Roger Martin, David Michaels, and Juan Uriagereka, 89-155. Cambridge, Mass. : MIT Press.
- Dalmi, Gréte. 2004. The role of AGRP in non-finite predication. Doctoral dissertation, Eötvös Loránd University (ELTE).
- 服部亮祐. 2020. 「空演算子移動における言語間の相違」『人間文化』47. 51-64. 神戸学院大学人文学会
- Hicks, Glyn. 2009. Tough-Constructions and their derivation. *Linguistic Inquiry* 40. 535-566.
- Kenesei, István. 2005. Nonfinite clauses in derived nominals. In Christopher Piñón & Péter Siptár (eds.), *Approaches to Hungarian* 9, 161-186. Budapest : Akadémiai Kiadó.
- Marantz, A. P. 1981. On the nature of grammatical relations. Doctoral dissertation, MIT.
- Montalbetti Mario, Mamoru Saito and Lisa Travis. 1982. Three ways to get 'tough'. In Kevin Tuite, Robinson Schneider & Robert Chametzky (eds.), *Papers from the Eighteenth Regional Meeting, Chicago Linguistic Society*, 348-366. Chicago : University of Chicago, Chicago Linguistic Society.
- Poole, Ethan, Stefan Keine and Jon Ander Mendia. 2017. More on (the lack of) reconstruction in tough-constructions. Ms., UCLA, USC and Universität Düsseldorf.
- Postal, Paul. 1971. *Cross-over phenomena*. New York : Holt, Rinehart and Winston.
- Rizzi, L., 1997. The fine structure of the left periphery. In *Elements of Grammar : Handbook in Generative Syntax*. ed. by L.M.V. Haegeman, 281-337. Kluwer Academic Publishers, Dordrecht/ Boston.
- Rizzi, Luigi. 2006. On the Form of Chains : Criterial Positions and ECP Effects. In *Wh Movement : Moving on*. ed. by L. Cheng, N. Corver, 97-134. Cambridge, Mass : MIT Press.
- Roberts, Ian. 1993. Restructuring, pronoun movement and head-movement in Old French. Ms., University of Wales, Bangor.
- Rosenbaum, Peter S. 1967. *The Grammar of English Predicate Complement Constructions*. Cambridge : MIT Press.
- Ross, John Robert. 1967. Constraints on variables in syntax. Doctoral dissertation, MIT, Cambridge, MA.
- Saito, Mamoru. 1985. Some asymmetries in Japanese and their theoretical implications. Doctoral dissertation, MIT, Cambridge, MA.
- Stowell, Timothy. 1986. Null antecedents and proper government. In Stephen Berman, Jae-Woong Choe & Joyce McDonough (eds.), *NELS* 16, 476-493. Amherst : University of Massachusetts, Graduate Linguistic Students Association.
- Takezawa, Koichi. 1987. A configurational approach to case-marking in Japanese. Doctoral dissertation, University of Washington, Seattle.
- Wurmbrand, Susanne. 2001. *Infinitives : Restructuring and clause structure*. Berlin/New York : Mouton de Gruyter.
- Zaenen, Annie, Joan Maling and Höskuldur Thráinsson. 1985. Case and grammatical functions : The Icelandic passive. *Natural Language and Linguistic Theory* 3. 441-483.